

白話小説『蘇知県羅衫再合』から崑曲『羅衫記伝奇』へ

三九二

廣澤裕介

はじめに

二〇一〇年ごろからか、中国や台湾でたびたびおこなわれる崑曲公演の演目の一つに「白羅衫」という作品がある。主人公が自分の生い立ちの秘密をめぐって、実父か養父かの二者択一を迫られるこの心理劇は、明末に成立した白話小説『蘇知県羅衫再合』（『警世通言』巻十一）と清初の崑曲『羅衫記伝奇』（一名『白羅衫』）をその骨格としている。明末清初という、白話小説にしても、また崑曲にしても非常に多くの名作が作られた時代に誕生し、しかし殊更に注目されることもなかったこれらの作品が、その基本的な要素を保存しながら現代に演じられ、観客を魅了している。これは何というめぐりあわせだろう。

物語の基本的な展開は、実の父親が殺されたときに（実際は生き延びる）、妊娠中の母親の腹中にあつた男子が父親を殺害した犯人によつて養育されて、やがて成長して実父殺害の真相を知り、その仇として養父を死地に追いやるといふものである。現代の崑曲上演では、男子成長後の物語が選段で演じられ、主人公といつてよい男子徐継祖を中心に登場人物たちの恩讐や家族愛が交錯する見応えのある作品である。

これらの作品が明末清初に成立するまでには、さまざまな作品から影響を受けてきた。時代をさかのほれば唐代小説「陳義郎」などがあり、『西遊記』に登場する唐三蔵の出生を語る「陳光蕊江流和尚」説話や元雜

劇「汗衫記」「合汗衫」などもその歴史の一部である^①。そうした有為転変の一場面に白話小説が崑曲（伝奇）となるといふ転機があり、現代の観客はそうした歴史を顧みることがほとんどないままに、実演される崑曲という形でその物語を享受している。小論は、現代の崑曲作品の直接的な原型を用意した白話小説の特徴と白話小説から崑曲作品になる際の変化について考察を加えてゆきたい。中国近世の戯曲と白話小説をめぐっては、互いに題材を共有して、戯曲の小説化、小説の戯曲化がおこなわれた。ただ、その作業がどのようなになされ、何がどう変換されるのかをつぶさに見られる作品は多くはない。特に、明末清初の江南文化を代表する崑曲に生まれかわるとき、どのような改編がどのような意図のもとになされたのかを考えてゆきたい。

これまでに二つの作品の関係や相違に言及したものに、董康『曲海総目提要』巻十六^②、それを踏まえた青木正兒『支那近世戯曲史』第十一章^③、莊一拂『古典戯曲存目彙考』巻十三^④、郭英徳編著『明清伝奇綜録』巻三がある。それら先賢の指摘を参照しながら、これまで論じられることがなかった変化の理由についても考察してゆきたい。

使用するテキストは、「蘇知県羅衫再合」については佐伯文庫旧蔵の『警世通言』巻十一を用いる^⑤。巻十一は全体で二十九葉からなり、冒頭の八葉が入話、残る部分が本話となり、本話の内容を検討する。『羅衫記伝奇』については『古本戯曲叢刊』三集所収の抄本をもとにする。ただこ

の抄本は結末の数折を未収にしており、その部分は清内府本等を参照した『後六十種曲』巻一所収「白羅衫」の翻刻を利用する。^⑥『羅衫記伝奇』の全本と言えるものは三種の抄本しかなく、刊刻されたものはなかったようである。

以下、本論中は便宜的に白話小説『蘇知県羅衫再合』を『蘇知県』、清初の崑曲抄本『羅衫記伝奇』を『伝奇』、民国以降に上演されたものを『白羅衫』と略称する。

一 白話小説『蘇知県』

まず、白話小説『蘇知県羅衫再合』の物語概要を確認しておきたい。

永樂年間、北直隸涿州の蘇雲は進士及第し、金華府の蘭溪知県を授かる。母親の張氏と弟蘇雨を故郷に残し、妊娠中の妻鄭氏とともに旅立つ。

旅の途中、従者が船賃を値切って乗った船が水漏れを起こし、徐能が操る船に乗り換える。徐能は山東の王尚書の名を掲げた船に乗って、陰では乗客を襲う裏稼業をしていた。徐能は、鄭氏の美貌に目を付け、その夜に黄天蕩という揚子江内の難所で仲間たちと蘇夫婦を襲う。蘇雲は川に投げ込まれ、鄭氏は徐能に連れ去られる。徐能の屋敷に閉じ込められた鄭氏は、徐能の弟徐用の助けによって逃げ出し、尼寺に駆け込む。そこで産気づいて男子を出産するが、尼寺で赤子を育てるのは後々面倒なことになりかねないと断られ、自分が着ていた女物の羅衫で赤子をくるみ、離れた村に置き去りにする。その赤子を偶然拾ったのが、追跡してきた徐能だった。徐能は喜んで赤子を連れて家に戻り、自分の子供として育てる。鄭氏は当塗県の慈湖庵で尼となり、身を隠した。

川に投げ込まれた蘇雲は半死半生の状態で水路を流れ、偶然徽州商人の陶公に助けられる。ただ、王尚書の船で起こった事件を訴えるわけにもゆかず、陶公の故郷で塾の教師をして過ごす。涿州に残った蘇雲の母張氏は一向に音信がないのを心配し、二男の蘇雨を蘭溪縣に行かせる。だが、蘇雨は兄が着任せずに行方不明であることを知り、悲しみのあまり客死する。

徐能に拾われた子は徐繼祖と名付けられ、十五歳で科挙に及第。会試に赴く際に、涿州を通り過ぎ、水を求めた井戸で偶然張氏に出会う。徐繼祖の横顔に蘇雲を認める張氏は、火災になって貧しい生活を送る経緯や行方不明の蘇雲らのことを話す。そして張氏は、蘇雲夫婦がのこした男物の羅衫を繼祖に贈る。

繼祖は十九歳で進士になり、刷卷御史となつて南京へ。捨てた子供の消息を求めて托鉢に出ている鄭氏が十八年前の襲撃事件を訴え出ると、繼祖はかつて張氏から聞いた話を思い出し、養父徐能への疑念を抱く。徐能の手下であり、自分の乳母の夫であった姚大を呼び出して、徐能が蘇雲を襲撃したいきさつをすべて自白させる。そのころ蘇雲もまた南京に来て操江御史に訴え出て、それを知った繼祖は徐能へのこれまでの養育の恩義を思うが、諸々の証言と羅衫等の証拠は揃っている。徐能とその一党を南京に招き、宴会を催し父子の礼をひととおり示したあと、その席で捕縛し、蘇雲を呼び出し江賊たちの顔を検めさせる。徐能は繼祖に命乞いをするが、役所へ送還される。実の父と子は名乗りを上げ、そこで母とも再会。徐繼祖は名前を蘇泰と改めた。

一連の経緯を朝廷に報告し、それが了承されると徐能たちを処刑した。徐能は、繼祖の立身によって三年富貴を得たことを思いながら、刑につく。

蘇父子が帰郷の途中で、山東臨清を通過すると、王尚書の家に招かれた。徐能の襲撃事件が王尚書本人に及ばなかったことを感謝し、宴席を設け、その娘を蘇泰に娶せることにした。婚儀が終わると蘇父子は故郷涿州に向かい、祖母張氏とも再会し、その後幸せに暮らし、官は都御史となり、息子二人も科挙に登第した。

十八年前に自分の血のつながった家族をちりぢりに引き裂いたのは、皮肉にも進士に及第し高官になるまで育ててくれた養父であった。引き裂かれた家族たちはそれぞれ離れた場所でも別々の人生を送りながら互いを思いやり、やがて再会に繋がる糸をたぐり寄せ、最後には全家団円となつて幕を下ろす。その最大の見どころは、自らの出生の秘密に気づきはじめた徐継祖が姚大に詰め寄り、まさかの養父への疑惑が信じがたい真相に変わるまでの葛藤である。そうした二人の父に対する狂わんばかりの心理を描くだけでなく、切迫した状況で生まれたばかりの赤子を捨てざるを得ず天の加護を願う鄭氏、孫とは知らずに消息を絶つた家族たちへの思いを語る張氏など、女性たちの儚くも絶えることない情念が描かれる。⑦。女たちのためまぬ思いがしずかに徐継祖の決断を促し、家族の結集へと導く、ファミリアの物語である。

こうした物語の主題と展開は、基本的に『伝奇』も軌を一にする。ただ、二つの作品を比較すると、テキストの性質に根本的な相違があることを認識させられ、また物語の曲折や登場人物の形象などに大小の相違がある。

そもそも『伝奇』の伝本三種はいずれも抄本であり、多くの戯曲作品が刊本となりレーゼドラマとなつていった時代だが、これは基本的に上演を目的とした戯曲テキスト、つまり実演用台本と考えるべきである。それは唱い演じられてこそ、真の姿がある。それに対し、白話小説は語

り物などの芸能に由来するものが多く、それが文字化され、あるいはそれにまねた文体で記され、文章という形で読み物として定着する傾向にあった。それは、誰かが読み上げるのを聞いたり、自身で読んだりするものである。同じ文字テキストでありながら本質的な相違があるので、それを念頭に両作品を考えなければならぬ。

物語の違いについては、上述のようにいくつかの先学による指摘があり、その中で筆者が注目したのは、物語の終盤にわずかに姿を現す王尚書の形象の変化である。両作品とも彼はわき役でしかないが、その人物像の変化は両作品の大きな違いの一つといつてよく、先学も注意を向けてきた。次章では、その指摘をふりかえりながら、詳しく見てみたい。

二 王尚書と官僚たち わき役たちの変容と消滅

二一 先行研究

わき役に過ぎない王尚書の人物像が、『蘇知県』と『伝奇』のあいだで不思議なほど大きな違いになっている。ここには何か相応の意味があるのではないか。

その相違については、早くも『曲海総目提要』巻十六「白羅衫」が次のように述べている。

〔『白羅衫』は〕蘇雲のことを演べており、小説「蘇知縣羅衫再合」をもとにしていて、「登場人物の」姓名や出来事はすべて符合している。劇中では蘇夫人「鄭氏」が出産した後に、老女につれられて王尚書の家に入り、その娘の乳母になる。その後徐継祖が尚書の庭園を訪れたときに、蘇夫人が突然告訴状を出す。この情節は少し異なっている。徐用が僧侶になつたのは、付け加えたのだろう。そのほか

は同じである。(演蘇雲事。本之小説。曰蘇知縣羅衫再合。姓名事蹟皆符。劇中以蘇夫人產子之後。收生媪引入王尚書家。爲其女之乳母。其後徐繼祖遊尙書園。蘇夫人突出告狀。此節稍異。徐用爲僧。亦係添出。餘並相同。引用の翻訳文内の「」内は筆者の補記。以下同じ。)

ここでは二つ違いが指摘され、一つは鄭氏が徐能の家から逃げ出した後の展開である。鄭氏は出産した赤子を捨てた後に、王尚書の家に行かずに、尚書の娘の乳母になり、さらに尚書の家を訪問していた徐繼祖に訴状を出したという。二つ目は徐能の弟徐用が僧侶になったことである。これらは確かに『蘇知縣』にはなかった展開で、特に一つ目は、鄭氏が尼寺には行かず、その代わりとなる王尚書の邸宅が重要な場所になるのだろう。なお、『伝奇』では、王尚書の邸宅は山東臨清ではなく、南京にあることになっている。

このほかの違いについて、『明清伝奇綜録』卷三「羅衫合」は、「蘇雲羈留山寨」と蘇雲が山寨に抑留されたことを加えており、鄭氏だけでなく蘇雲も襲撃事件後の展開に相違があるようだ。また『曲海総目提要』卷十六所収の物語の梗概(『蘇知縣』の内容に近い)と比較して次のようにいう。

抄本(『伝奇』)には蘇雲が劉権の寨に拘留されたこと、兵部尚書王國輔は蘇雲の妻鄭氏を家に留め置いたこと、鄭氏は王尚書の庭で訴え出したことなどが書かれており、これらは『提要』には書かれていない。『提要』では蘇雲が徽商陶某に救われて三家村で教師となったこと、鄭氏は尼寺で剃髪したこと、徐能がなんと王尚書の船を操業することが書かれている。(抄本所叙蘇雲羈留劉権寨中、兵部尚書王國輔收留蘇雲之妻鄭氏、鄭氏在王家園中告状等節、皆爲『提要』所無。而『提要』別作蘇雲爲徽商陶某所救、教学三家村、鄭氏削髮於尼庵中、徐能所操亦王尚書舟等。)

白話小説『蘇知縣羅衫再合』から崑曲『羅衫記伝奇』へ

王尚書に関する相違としては、彼が兵部の尚書であり、名前が「貴」ではなく「國輔」であること、また『提要』の概要では王尚書の船に徐能が乗るのに『伝奇』にはそうした事情は書かれないことを指摘する。蘇家の人々が苦難を強いられるのは、事件が尚書名義の船で起こったからこそであり、そうした重要な設定も変化しているようである。

これらさまざまな指摘があるが、いずれも目録や提要での記載であるので断片的で全容がつかみにくい。以下、両作品それぞれの王尚書の形象を詳しく見てゆきたい。

二一 二 『蘇知縣』の中の王尚書

『蘇知縣』の中の王尚書は、徐能が操る船のオーナーであり、若い時に揚州から妾を迎え入れ、現在は高齡を理由に官界から身を引いて故郷の山東で暮らしている。徐繼祖が蘇雲襲撃事件を穩便に裁き、その累が王尚書の身上に及ばなかったことに感謝して、山東臨清を通過した蘇泰(徐繼祖)を招いて自分の娘を娶せる。彼の役どころはこれだけである。

物語に彼自身が登場するのは、この臨清での最後の場面だけなのだが、物語における彼の存在感は小さくない。彼のことを示す「王尚書」「老尚書」「尚書」という語は、全体で二十回ほど記されており、その半数はやはり臨清の場面になるが、蘇父子とのやりとりの中で主語(行為の主体者)として使われるのはわずかに四回^⑨。その四回以外は、襲撃事件に関わるところで「船上豎的是王尚書府中的水牌」「與山東王尚書家打官司」という使い方が大半で、また徐能と繋がるきっかけとなる妾やその家族に関連して数回使われる。つまり半数以上は襲撃事件に関わって記され、特に同じ官僚世界に属する蘇雲が事件を思い起こすたびに王尚書の名前に言及する。実際には最後の場面でしか登場しないのに、名前だけがたび

たび記され、その「影」のみが物語各所に出没する。

彼が直接登場した場面では、世故に長けたしたたかな官僚ぶりを見る事ができる。そもそも蘇雲襲撃事件と直接の関係はないにせよ、徐能の裏稼業を全く知らなかったのかと誰しもが思うところだろう。江中に投げ込まれた蘇雲を救った徽州商人陶公は尚書との裁判に関わるのを避け（陶公是本分生理之人、聽得說要與山東王尚書家打官司、只恐連累、有懊悔之意）、また、事件を裁く徐繼祖が事件と尚書との関係をあえて採り上げなかったこと（船雖尚書府水牌、止是租賃、王府並不知情）など、尚書との関係を忌避し、忖度する社会風潮も描かれる。官僚社会の婚姻ネットワークの「力」を熟知した大物官僚らしい行動をとり、官の世界の外側にいる人々にとっては、できれば関わりたくない、不気味で遠ざかるべき、そうしたイメージをまとうている。

それに対し、『伝奇』ではそのようなイメージはほとんど感じられない。それを思わせる記述を巧妙に回避したかのように、物語自体も大きく変えながら、その人物像が変容する。『伝奇』では別人のようであり、次節でそれを確認してゆきたい。

二一三 『伝奇』の中の王尚書

驚くべきことに、『伝奇』の中では、王尚書と徐能は一切関係がない。接点すらない。王尚書は南京に住まう官僚であり、船を所有していないのか、徐能に貸すこともない。前述のように『蘇知県』の中では、王尚書の名前が襲撃事件を公にしにくくし、官僚世界の内部にいる蘇雲は十八年も訴訟を起こせず、蘇家の人々が苦難を強いられる。王尚書の船だったからこそ、事件は十八年もの間アンタツチャブルだったのである。そこで、王尚書と事件を結びつける徐能について『伝奇』を見てみると、彼のキャラクターも変化している。襲撃事件を起こす点や徐繼祖の

養父となるなどの点はほぼ同じだが、徐能が盗賊活動をする地域には劉権大王という盗賊集団をとりまとめる大親分がいて、その配下のグループの一つを率いるのが彼なのである。子分（あるいは弟分）である徐能は盗賊行為で得た財宝などの割り前を、親分（あるいは兄貴分）の劉権に上納せねばならず、時折ご機嫌伺いや時節のあいさつをしにゆくことが求められている。『蘇知県』の徐能は王尚書の船を操る自活の盗賊集団の首領であり、気ままに強盗をはたらき、裕福な暮らしをしており、状況が大きく違う。『伝奇』では、徐繼祖が拳人になったときには、劉大王からご祝儀が出て、徐能の組織内の格が上がったりして、徐能は盗賊組織の中の中堅リーダーというキャラクターである。『蘇知県』にあった王尚書との繋がりは、『伝奇』では劉大王との関係性に転化され、ここでは王尚書と徐能は接点すらないのである。

ちなみに、盗賊組織の大本締めである劉大王は、揚子江に投げ込まれて半生半死だった蘇雲の身柄を引き取り、文書係として配下に置こうと山寨に軟禁する。そこから逃げ出すことができなかつたから、蘇雲は訴え出られなかつた、とされる。前掲『明清伝奇綜録』がいう「蘇雲羈留劉権寨中」「蘇雲羈留山寨」とはこのことである。¹⁰⁾

このように王尚書と事件が起こった船とは関係がなく、揚州で娶った妾も登場せず、さらに蘇雲を救う徽州商人陶公も登場しない。こうなると『蘇知県』の王尚書が纏うマイナスのイメージは、どこからも生じようがない。

それどころか、『伝奇』の王尚書は鄭氏に救いの手を差し伸べ、蘇家の人々を支援する側に立つのである。

『伝奇』では、徐能の屋敷から脱出した鄭氏は、兵部尚書の王国輔（王尚書）の三歳になる女兒の乳母となる（10折、14折）。そのうち女兒が成長すると、鄭氏と母子の契りを結ぶ（19折）。蘇雲襲撃事件から十八年後、

御史となった徐継祖は王尚書の招きでその屋敷を訪れ（25折）、それを知った鄭氏はおし殺してきた感情を抑えられず唐突に徐継祖の前に出て襲撃事件を訴え出る（26折）。

また、『伝奇』の伝本三種の内の清内府抄本と懷寧曹氏旧蔵抄本を見ている『後六十種曲』本では、王尚書は鄭氏が唐突に訴え出て徐継祖を驚かせたことを咎めるが、娘の支持などもあつて鄭夫人の訴えを支援することにする（30折・請罪）。そして継祖が徐能一味を処断して、蘇父子の再会がなつたところに登場し、自分の娘との結婚を申し出る（32折・雪冤）。

このように『伝奇』では、鄭氏は尼寺に逃げ込むのではなく、王尚書の家人に助けられて、尚書の娘の乳母となつて十八年を過ごす。尚書の家に向面することになった鄭氏は「蒙収録、蒙収録、此恩怎忘。這恩徳人間無両（私に居場所を与えてくださり、このご恩はどうして忘れられまじょう。このような恩徳の人は世の中に二人とおりません。）」（帰朝歎）と唱い、感謝の意を示す。王尚書は、鄭氏の身柄を保護し、娘のために鄭氏の願いを聞き入れ、徐能断罪のために行動を起こそうとする人物である。尚書である以上、大官僚らしい振る舞いは舞台上で当然表現されただろうが、『蘇知県』の中の不気味なものとは性質が異なるものだったろう。

こうした変化は、王尚書のイメージチェンジのために物語が変化したのか、それとも物語を変化させるために王尚書の形象が変化したのか。この問題はもう少し視野を広げて考えたい。

二一四 官僚たちの形象

『蘇知県』には王尚書以外にも何人かの官僚が登場している。実は彼らの形象も『伝奇』において変化し、またそもそも登場しなくなつたり、従来には指摘されていない違いが散見する。

それらの人物像の変化をそれぞれまとめると、次のようになる。

①高知県

【蘇知県】 着任することなく行方不明になつた蘇雲の代わりに蘭溪知県となる。兄蘇雲を探して蘭溪に来た蘇雨と会い、自分が補欠で着任したと説明する。落胆して病氣になつた蘇雨に薬を届けて面倒をみたが、蘇雨は病死し、その棺を城隍廟の道士に管理させる。

【伝奇】 高誼は蘇雲の同年の進士。及第後に直ちに官を得られず故郷に戻り途中、蘭溪への赴任が決まつた蘇雲の故郷涿州を訪れ、別れのあいさつをする（2折）。その後、着任することなく行方不明になつた蘇雲の代わりに蘭溪知県となる。兄蘇雲を探して蘭溪に来た蘇雨と会い、自分が補欠で着任したと説明する。落胆して病氣になつた蘇雨に薬を届けて面倒をみたが、蘇雨は病死し、その棺を城隍廟の道士に管理させる。涿州の張氏の家へ使者を遣り、二人の息子の消息を伝え、銀二十両を送る（17折）。数年後、徐継祖の副官として南京に赴任し、襲撃事件を訴えるために南京に来た蘇雲と偶然再会する。徐能・徐継祖を訴えようとする蘇雲に、徐継祖は徐能の息子ではないだろう、だから訴えずに直接会いにゆくのがよいとアドバイスをする（24折）。事件解決後に、皇帝の聖旨を奉り、蘇雲を蘭溪知県に、徐継祖の蘇姓への改姓を認め太僕寺少卿にすることなどを伝える（『後六十種曲』本33折「団円」）。

②周兵備

【蘇知県】 鄭氏が襲撃事件を訴え出て、徐継祖がその訴状を読んだ際にその場に居合わせる。徐継祖が困惑して「この婦人が訴えているのは、まさに私の父です。私は彼女の訴えを認めたくありませんし、他の役所に訴え出るかも知れません」と話すと、周兵備は「先生はまだお若いので臨機応変というのをご存じなく、こんな問題は何でもないことです。」

巡捕官にそのご婦人を察院まで連れてこさせ、そこまで来たらひとしきり板で打ちのめし、その後婦人をたたき殺してしまえば、後の禍を絶つことができます。」と大笑いしながら答える。

【伝奇】登場しない

③林御史

【蘇知県】操江御史。蘇雲と同年の進士。襲撃事件を訴える蘇雲の訴状を受け取り、事情聴取のため山東の王尚書のところに使者を出す（徐継祖がその使者と会い、山東にゆくことを止めさせ、その代わりに容疑者（徐能）を捕縛できるように取り計らうと約束する）。事件解決後に、蘇親子の再会を知り、お祝いにゆく。

【伝奇】登場しない

三人の官僚の形象の変容をまとめると、①高知県は物語への登場回数が増えて、その役割が拡大している。その一方で、②周兵備と③林御史は存在自体がなくなり、登場すらしない。

②周兵備は『蘇知県』の中では、やはり中心的な登場人物ではないが、強烈な印象を残す人物である。鄭氏が徐継祖に訴え出たところに居合わせており、下手下人が養父徐能だとする訴状に徐継祖が戸惑っていると、訴えてきた鄭氏を殺し、事件・訴訟自体をもみ消せばよいと助言する。明代の訴訟の裏側とその不正さ、官の横暴さ凶悪さを齒に衣着せず説き明かす白話小説らしさが出ている。この周兵備の恐ろしい助言に徐継祖は結局は従わずに、しばらく鄭夫人を寺に戻し、真相を確かめるべくひそかに動き出す。

この場面は鄭氏の訴状を見た徐継祖が、激しく動揺する中で幼少期からの記憶の断片をつなぎあわせ、数年前に涿州で張氏から聞いた話を思

い出し、初めて養父徐能の正体に向き合い、捜査を始めるきっかけとなる段階である。そして次の段階では、実父蘇雲が訴え出て、そこに居合わせるのが③林御史である。実母と実父がそれぞれ訴え出る二段構えになっており、そこに居合わせた人物の発言・対応を対比的に見せながら、徐継祖の重大な決断を導いてゆく。養父徐能へのこれまでの養育の恩義と、血のつながった家族たちへの思いが綯い交ぜになり、次第に養父の悪事を暴き報復の思いをつのらせてゆく葛藤の過程を段階的に描くところである。

ただ、仔細に小説を読んでみると、徐継祖は母の訴状を見たときから徐々に事件解明に向けた動きを主体的に進めており、そこには自分自身の人生をかけた決断にむかってゆく姿がある。そこに居合わせた周兵備や林御史の発言や行動は、彼が意思を固めるための触媒であり、心の動揺や変化を段階的に、丁寧に描くためにあるエピソードである。

ここを『伝奇』は省略してしまう。演劇の舞台では実際に演じる人間が必要であり、その舞台衣装なども要る。舞台上に登場する人物が増えれば、物語がややこしくなる。この二人を登場させずに、物語の曲折もバツサリと省けば、より重要な場面にエネルギーを集中できる。むしろその重要な場面とは、訴状を見た後に養父への疑心を深め、姚大を問い詰める「看状」である。

そうした上演の都合で、登場回数とその役割を拡大させたのが①高知県である。

『蘇知県』での高知県は、蘭溪県に來た蘇雨に同情して心を尽くした応対をするだけだったが、『伝奇』では下線部分の設定・内容が加えられる。蘇雲と同年の進士という設定で、蘇家への訪問、蘭溪に來た蘇雨への応対、張氏への連絡と金銭的援助、蘇雲との再会と支援など、蘇家の人々と浅からぬ縁を持ち、彼らを陰に陽に助けるキャラクターになって

いる。その加えられた部分は『蘇知県』の林御史に重なるところがあり、彼は蘇雲と同年の進士で、蘇雲の訴状を受けとって調査を開始し、蘇家の団円を知ってお祝いにゆく。それらは『伝奇』の高知県の形象に添加され、役柄が集約されたのだろう。林御史を消滅させ、高知県がその役割を吸収するかたちで拡大したものと考えられる。

ここまで確認してきた官僚たちの形象の変容をまとめると次のようになるだろう。

王尚書は、『蘇知県』では最後の場面に一度しか登場せず、しかし蘇雲襲撃事件の立件に不気味な影を落とす大官僚という形象だが、『伝奇』ではそうしたマイナスイメージは一切なく、鄭氏の庇護者となり、娘を継祖と結婚させる人物となる。蘇ファミリーを遠巻きに支援する人物に変化したのである。また高知県は、『蘇知県』では蘇雨以外に関わりを持たなかったが、『伝奇』では蘇雲との関係性を強め、その母張氏をも支援する人物となる。『伝奇』で登場する官僚はこの二人だけであり、彼らは善人として描かれている。

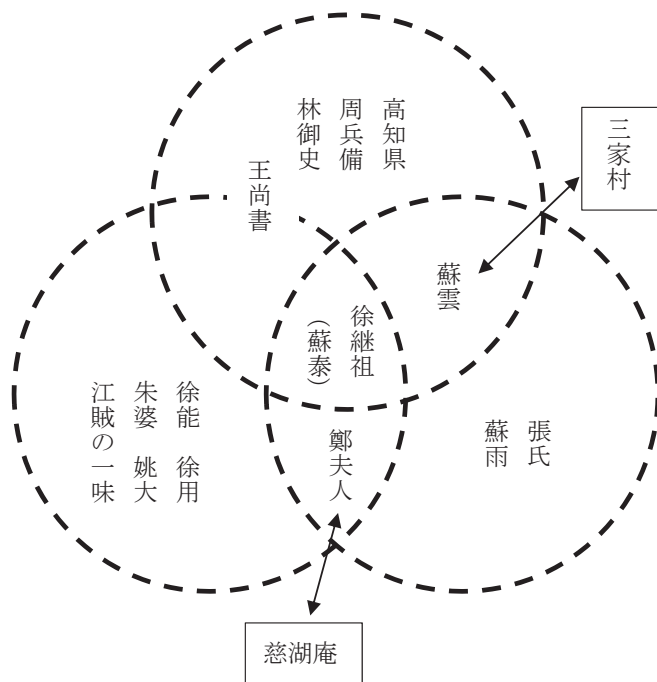
そのような『伝奇』と比べれば、『蘇知県』はより多様な人々を描いている。高知県や林御史のように蘇家の人々に優しく接する人もいるが、横暴な周兵備や謎多き王尚書などもある。元来の語り物芸能であれば、登場人物が増えるほどに物語が複雑になるので、多くの人物を描くことを避けるように思われるが、白話小説にとって小さな悪役たちは時に必要なのだろう。

以上、『蘇知県』から『伝奇』になる際の変化を、物語に登場する官僚たちの形象に注目して論じてきた。こうした登場人物たちの個々の変化が、物語全体の中でどのような影響を及ぼすのか、またその変化が崑劇という江南地域の文化の精華とも言われる演劇の特徴とどう関わるのかを次章で考えてみたい。

三 白話小説から崑曲へ

『蘇知県』から『伝奇』に生まれかわる際の登場人物の変化を物語全体の中で考える際に、下図で示すような『蘇知県』の人物関係のモデル化は、その変容のありようを見やすくする。

『蘇知県』の登場人物は、かさなりあう三つの円の中に配置することができる。



物語の中心となるのは二つの円で、一つは、蘇雲や鄭氏、張氏ら血族で形成される蘇ファミリーが作る円であり、それと対峙するのが徐能、徐用、守り役の姚大や江賊一味が形成する徐ファミリーの円である。この二つの円が重なる部分を持ち、そこに徐繼祖や鄭夫人が配置される。本来、蘇ファミリーに入るべき二人が、襲撃事件によって徐ファミリー

へと移行し、さらに鄭氏は慈湖庵へ身を隠し、徐継祖は二つの円が重なる部分で板挟みになる。それが、両グループの怨恨となる。そしてもう一つが官僚たちの円で、高知県、周兵備、林御史などが属する。蘇ファミリーの円と重なる部分には蘇雲が配置され、彼は襲撃事件によって三つの円の範囲から姿を消す。また徐ファミリーの円と重なる部分の境界線に王尚書を配するのがよいだろう。蘇ファミリーと徐ファミリーが対立する中で、この第三の円が物語のスパイスになっている。

蘇ファミリーの円からは、鄭氏、徐継祖、蘇雲、そして蘇雨までが離脱して、その円は十八年間休眠状態となる。徐継祖は三つの円が重なるところ、この図の中心に配されよう。蘇雲、鄭氏、徐継祖が再会する場は、徐能が率いる盗賊グループのメンバーも勢揃いした大宴会であり、徐能が人生の最高潮を迎えたときが、養父養子の決別の瞬間となる。蘇ファミリーの結集と徐ファミリーの転落、二つのファミリーの頂点が入れ替わる、という仕掛けである。

一つは血族の円、一つはアウトロー世界の円、もう一つは官界の円である。この三つは、中国近世を考えるとときに重要な社会の枠組みであり、それがこの白話小説でも確認される。

この三つの円のモデルをもとに考えると、『伝奇』では官界の円が解体されたことになる。解体されて残された高知県と王尚書は、蘇ファミリーに近づき、彼らの支援者となる。すると物語が単純になり、善人と悪人、そして善人を支援する官僚という構造になり、大きく言えば善と悪で割り切れる物語になったといえよう。

以上のように、白話小説から演劇（ここでは崑劇）へ転換される際には、登場人物の数の減少、登場人物の形象の変化、物語の変化（単純化）、人間関係の単純化などが確認されるのである。白話小説を読む際には、内容が複雑になって把握しにくくなったなら、物語を遡って読み返す、読み

直すことが手軽にできるが、演劇の上演は一回性のものであり、やり直すことも振り返ることもできない。よって時に複雑な人間関係や紆余曲折は回避され、削ぎ落すべきところは削ぎ落すという整理がなされるのだろう。そのうえで、唱や喜劇的な要素などが加わる戯曲化がなされたのだろう。

崑曲は歴代の古典演劇の中でも文雅な劇種とされ、明末清初の江南の知識人に愛好されたと言われる。その観劇者が官僚世界に近い人々であるなら、創作や改編の段階で、『蘇知県』が描いた官僚たちのマイナスイメージは避けられ、形象の変化が求められたと考えられる。

また、『伝奇』が実際に知識人の邸宅内で演じられた時のことを考えると、王尚書という形象にはまた別の意味があったと思われる。前述のように『伝奇』の「遊園」の一折は王尚書の庭園で鄭氏が訴え出る場面であり、それが実在の知識人の邸宅というロケーションにおいて、生身の俳優たちによって演じられると、フィクションの世界の出来事が地続きで目の前で発生することになる。鄭氏が訴え出るといふ事件は目の前の現実、真実となり、その時、実在の邸宅は王尚書の庭園となる。と同時に、邸宅の主人は王尚書に同一化する。そうした現実と虚構が地続きとなって、虚実が二重映しになって融合する空間の主宰者とは、ほかならぬ王尚書（邸宅の主人）なのだろう。自分の家というプライベート空間での上演は劇場などの公共スペースとは異なる、格別な体験だったのである。「遊園」はオリジナルの『蘇知県』にはない、『伝奇』が新しく加えた場面であり、崑曲が江南文人の邸宅で演じられていた時代には、非常に重要な一折だったのだろう。そう考えたときに、王尚書の人物像や彼の関わる物語が改編されている理由は明らかになる。

「遊園」は、この崑曲が実際に演じられるときの趣向のために加えられ、王尚書はこの作品が実演される邸宅の主人、あるいは年長者が、自

分を投影しやすいように書き替えられているのである。『蘇知県』という白話小説からの変化の多くが、ほかでもない崑曲として実演されるための、こうした特徴に合わせたものなのだろう。

なお『伝奇』の三種の抄本のうち一本が清内府本とされており、その実演は、皇帝の家族たちも見ていたことを忘れてはなるまい。

おわりに

実のところ『蘇知県』は暗い作品であることは否めない。蘇一家の命運が最終的に盗賊徐能の人生と反転するとはいえ、家族が突発的に離散する衝撃的事件と、十八年もの間一家が味わう辛苦を克明に描く。しかも徐継祖は十八年の恩義に背を向け、養父を処刑場に送る。最終的に王尚書の娘と結婚する展開も、ハッピーエンドの典型的なスタイルで幸不幸の帳尻を合わせたいのだろうが、悲しい運命を背負う徐継祖に同情を寄せていた読者にとっては、極めて官僚的なやり口で王尚書という義父（第三の父）のもとに回収されてゆくさまは、ひどい手口でかすめ取られてゆくような錯覚すら覚える。これは読者にとってアンハッピーなエンディングではないか。そうしたもやもやと割り切れない読後感をあたえるためか、明末の短篇白話小説シリーズ「三言二拍」の中から名作を選んだ『今古奇観』が作られるときに、この作品が選ばれることはなかった。

それでもこの作品が崑曲という江南文化の精緻ともいえる戯曲の題材になるのは、儀真や南京という江南の城市を舞台とするご当地作品であったからだろう。^①『蘇知県』から削ぎ落とすべきところをきれいに落とし、そのうえで崑曲にふさわしい要素を取り入れ、戯曲化がおこなわれたのである。古典戯曲の道化にふさわしい徐能一味には、崑曲特有の卑

俗な呉方言（蘇白）をふんだんに使った喜劇的な場面を与え、尚書の庭園における鄭氏と尚書の娘とのやり取りは華やかで女性的な美しさを加えたことだろう。襲撃事件の後に父親の蘇雲は劉大王のもとで盗賊集団の文書係にさせられそうになり、いっぽう母親の鄭氏が王尚書のもとで娘の乳母になるのは、二人の処遇が対照的であり、いささか作りすぎの感は否めないが、その能天気さが中国古典演劇のストレートな笑いとこだわりに直結していて心地よい。このように物語の改変部分が崑曲の特徴と重なっており、崑曲になるため、崑曲作品として最適化されたわけである。そうした新しく加わった崑曲らしい明るさや華やかさと、白話小説が本来有していた血族が互いを思い合う心理描写が融合し、『伝奇』が成ったのだろう。

『伝奇』あるいは『白羅衫』のその後を詳しく見る余裕はないが、目撃した資料のいくつかを紹介しておきたい。

まず青木正兒氏は『支那近世戯曲史』で、自身の留学時代と思われる一九二〇年代の様子を記している。

今其の數齣頗る歌場に流行す。「井遇」(徐継祖が水を乞ふて祖母に遭ふ場)、「遊園」(王国輔の園に母に遇ふ場)、「看状」(父蘇雲の訴を考へる場)、「詳夢」(老僕をして徐能等一味を欺き召び来たらしむ場)、「報冤」(徐能等を裁き、又両親と再会する場)の諸齣是なり。

氏の記載では、三十折を越えるような全文にちかいものではなく、選段で名場面だけが演じられ、商業的な演劇施設で「流行」していたという。五つの折が連続して、物語のあらましがわかる形で演じられたのだろうが、この五つは激しく細やかな心理的表現が求められる場面であり、後世の実演の中核となる場面がすでに抜き出されていて興味深い。なお、この中に「遊園」の一段があるということは、鄭氏は王尚書の庭園で訴え出したことになり、つまり『伝奇』系のテキストが上演されていたのだろう。

さて、その九十年後に筆者が目にしたのは、二〇一三年十一月の台湾台北市での江蘇省崑劇院の公演である。その戯単をあらためて見かえすと、施夏明が徐継祖を演じ、「井遇」「庵会」「看状」「詰父」の四幕構成になっている。この中の「庵会」という一折は、御史となった徐継祖が立ち寄った尼寺に鄭氏が住んでおり、そこで訴え出るという内容である。鄭氏の逃亡先が仏寺になっており、『伝奇』のように王尚書の邸宅ではない。つまり『蘇知県』の展開とも異なるが、仏寺に身を寄せる点では近く、『蘇知県』が参照され改編されたのかも知れない。「詰父」は徐継祖と徐能が正面から対峙する二人劇で、一九八八年の張弘氏による編劇から加えられた一折のようで、徐能の人間、感情を描くことを拡大させている。莫驚濤氏はこの一九八八年の改編を崑曲に現代的意義を付与した第一段階として評価しており、また多様な評価を得た二〇一六年蘇州崑劇院の「新編白羅衫」を第二段階として論じ、現代の『白羅衫』の変容を考える上で重要な視点を提示している¹⁸⁾。

本論冒頭でも触れたように、この物語の特色は凶悪な事件のために一家が離散し、苦しい状況に置かれた人間の状況と心理、自分の出生に關わる衝撃的な事実に驚き、二人の父の間で動揺する徐継祖の姿を丹念に描くところにある。それはジャンルを超えた改編がなされた際にも変わることなく継承されてきた。ただ、この作品が現代に演じ続けられるのは、それだけにとどまらない、多面的な魅力を持つからだろう。たとえば、徐継祖が離ればなれになった家族たちとそれと知らずに遭遇し、事件を解き明かすための小さなかけらを集め、十八年間隠された真相を明らかにし、まさかの犯人と対決する展開はミステリー作品のようである。現代人の趣向にこたえる骨太な物語も具えて、その上で古典演劇特有の複雑な心理を表現する唱やしぐさの演技を見せつけ、古典劇に興味を持たない観客も作品世界に引き込む力に溢れる。そしてまた「家族」とい

うテーマも時代を超越する普遍的なものであり、登場人物が祖母、両親、子供と各世代にわたり、また脚色や俳優の配置もバランスよく、それぞれの見せ場があつて、多様な観客がそれぞれの目線で感情移入しやすくなっている。

YouTubeなどの動画サイトでも、崑曲やその他の劇種の「白羅衫」が公開されており、今後ますますそれを知る人は増えてくるだろう。

本稿は、白話小説とその戯曲化について、そこに見られる変化を精査し、その変化の理由を内容面と実演面での問題としてささやかな考察を行ってきた。白話小説と芸能の関係では、一方から他方への影響あるいは転化（小説化・戯曲化など）が繰り返し行われ、『蘇知県』成立の際にも何らかの先行作品をもとに小説化がなされ、小説から戯曲化されて『伝奇』が成ったのである。その間の作業が具体的にはどのようなものであったのか、少しでも明確になり、一つの例として参考になれば幸いである。崑曲に関して理解の浅い所や誤りもあるかと思う。御批正を賜りたい。

※小論はJSPS科研費基盤研究C(15K02438)の研究成果の一部である。

注

- ① 関連する先後の作品について簡略にまとめたものに、郭英徳編著『明清伝奇綜録』巻三「羅衫合」がある（河北教育出版社、一九九七年七月）。ここでは、『原化記』崔尉子、『乾牒子』陳義郎、『奇聞録』李文敏の唐代小説、『青瑣高議後集』巻四從弟害起謀其妻の卜起、元雜劇の張国賓「相国寺公孫合汗衫」の各版本等を挙げ、また逸失した明清戯曲作品の記録や近現代に上演されている劇種・作品名などを紹介している。また大塚秀高氏「王府と原小説―江流和尚の物語から「西遊記」を考える」（埼玉大学教養部『埼玉大学紀要』二九、一九九三年）が「陳光藥江流説話」との関

係から論じている。

- ② 人民文学出版社、一九五九年五月。
- ③ 弘文堂、一九三〇年四月初版。のち『青木正兒全集』第三集（春秋社、一九七二年九月）所収。
- ④ 上海古籍出版社、一九八二年十二月。
- ⑤ 『警世通言』の版本は、従来蓬左文庫等所蔵の兼善堂刊本が重視されてきたが、大塚秀高氏の研究（『『警世通言』版本新考』、埼玉大学『日本アジア研究』九号、二〇一二年）により、佐伯文庫旧蔵の刊行者不明本の成立の方が早いことが明らかになった。現在その原本を見ることができないが、東京大学東洋文化研究所にその複写がある。
- ⑥ 『伝奇』の版本については、『古本戯曲叢刊』三集所収抄本と清内府抄本と、懷寧曹氏旧蔵抄本の三種があり、『明清伝奇綜録』卷三「羅衫合」は「此三本内容基本一致、関目稍有異同」という。翻刻排印本に『後六十種曲』第一冊（復旦大学出版社、二〇一三年六月）があり、郭英徳氏と李志遠氏の解題には「此次校点本以『古本戯曲叢刊三集』本為底本、齣目多依清内府鈔本増補、清内府鈔本所無者、則依懷寧曹氏旧蔵清中葉鈔本。三個版本文字稍有出入、故整理時、將明顯有誤或缺的文字加以校改。」という。莊一拂は『古本戯曲叢刊』収録の抄本（傳鈔本）を鄭振鐸氏の蔵書とする。筆者は清内府抄本、曹氏抄本は未見である。
- ⑦ 『蘇知原』の登場人物の形象を論じた李麗霞「『警世通言』蘇知原羅衫再合」中の人物形象分析（『蘭州教育学院学报』第三一卷第四期、二〇一五年四月）では、「文弱書生」の面を持つ蘇雲に対して、鄭氏を「隱忍堅貞」「相对来说、其形象較有豐滿」とする。
- ⑧ 「鄭氏為王尚書家乳娘、蘇雲羈留山寨、及徐用出家為僧等節、系添出、余并同小説（鄭氏が王尚書の家で乳母になったこと、蘇雲が寨に拘留されたこと、徐用が出家して僧になったことなどは、『伝奇作品』が）付け加えたことで、その他は小説とおなじである。」。そのほか、青木正兒氏も崑曲「白羅衫」の断片的に残る伝本・資料の中で、物語に異同があることを指摘している。「『曲海総目提要』に據れば此劇は小説『蘇知原羅衫合』に本づき姓名事蹟皆符合すと曰ひ、その梗概も出せるも、『綴白裘』『六也曲譜』等に載する所の散段六石齣を以て之を見れば、事蹟稍合はざる所有

り。」

- ⑨ 王尚書が主語となっている文章と認めるのは次の四つである。①後來打聽得蘇御史審明、船雖尚書府水牌、止是租賃、王府並不知情。老尚書甚是感激。②王尚書道「老夫有一末堂幼女、年方二八、才貌頗頗。倘蒙御史公不棄老朽、老夫願結絲蘿。」③三朝以後、蘇公便欲動身、王尚書苦留。④王尚書不好擔攔。
- ⑩ 劉大王と蘇雲については山下一夫氏「台湾皮影戲『蘇雲』考」（『都市芸能研究』十七輯、二〇一九年二月。Web版 <https://wagang.econ.hc.keio.ac.jp/~chengyan/index.php?%E3%80%8E%E9%83%BD%E5%B8%82%E8%8A%B8%E7%A0%94%E3%80%8F%E7%AC%AC%E5%8D%81%E4%B8%83%E8%BC%AF%E5%8F%B0%E6%B9%BE%E7%9A%AE%E5%BD%B1%E6%88%AF%E3%80%8E%E8%98%87%E9%9B%B2%E3%80%8F%E8%80%83>）にも言及がある。
- ⑪ 筆者はかつて『蘇知原』と江南の関係について「明末の蘇州と揚州の物語——短篇白話小説集『警世通言』——」（松村昂編著『明人とその文学』汲古書院、二〇〇九年三月）で論じた。また同作品について、科挙の物語という観点から「科挙を描く明代短篇白話小説——古今小説『警世通言』『醒世恒言』から」（『立命館文学』六一五号、二〇一〇年三月）で論じた。
- ⑫ 名古屋大学が所蔵する青木正兒文庫内に、仙寛社の戯単七枚が収められているが、『白羅衫』に関わる演目は見られない。青木氏は『支那近世戯曲史』の中で、「又未だ全本を見ず」といって、『曲海総目提要』の梗概を片手に、また『綴白裘』『六也曲譜』と照らし合わせており、つまり全文に近いテキストを見ていない状態で執筆している。また『後六十種曲』『白羅衫』解題には、「清代の道光咸豊年間までは多くの崑劇劇団が全本での上演をすることができていた（至清代道咸年間、許多崑劇班社仍可演出全本）」とある。また民国二十二年（一九三三年）の仙寛社による折子戯での上演について言及している。
- ⑬ 「由『白羅衫』の改編看伝統劇目的現代阐释」（『戲劇』二〇一七年第五期）。